

# リヤド日本人学校（サウジアラビア王国）への 赴任を通して

清水町立清水小学校

河井義徳

## 1 ・ 派遣国の概要

サウジアラビアはアラビア半島の大部分（約85%）を占める国で、その総面積は215万Km<sup>2</sup>。日本のおよそ6倍である。

国土の多くは砂漠におおわれ、東はアラビア湾（ペルシャ湾）、西は紅海に面している。

サウジアラビアの人口は2713万人（※2010年の国勢調査による）。そのうち、外国人が843万人（うち日本人は900名ほど）いる。国内人口のおよそ三分の一は外国人だということになる。

これは労働力の多くを外国人労働者にたよっているからである。全労働力の67パーセントを占めると言われる。（民間労働者の90～95パーセント）

サウジアラビアに外国人労働者が導入されたのは1970年代に急速に経済が拡大したため、労働力が不足したからだ。また、サウジアラビア人が肉体労働を嫌う風潮にあったのも外国人労働者を増やした一因であるといえる。現在はサウジ人だけでも労働人口から考えると、国内の労働力をまかなえるのだが、働きたがらないサウジ人の若者は室内での事務職等のみを希望し、若年層の就職率は大変低い。この問題はサウジアラビアが抱える大きな社会問題となっており、サウジ政府は「サウダイゼーション（サウジ化）」という政策を進め、サウジ人でしか就けない職業を定めたり、企業内のサウジ人の占める割合を決めたりしているが、なかなか効果が上がっていないのが現状である。

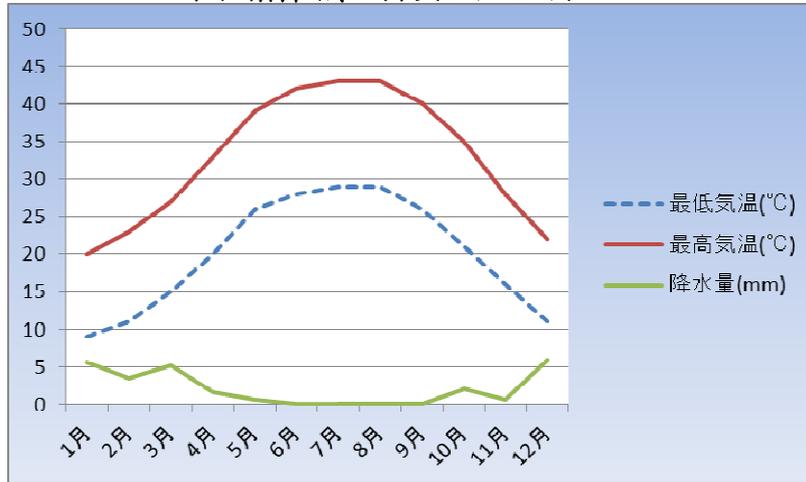
サウジアラビアと言えば、乾燥した砂漠気候を思い浮かぶであろう。実際、リヤドの北にはネフド砂漠、南には広大なルブ・アル・ハリ砂漠がある。また、この二つの砂漠の間には、南北に延びるダフナー砂漠がある。サウジアラビアの国土の三分の一はこれらの砂漠によって占められている。



私たちの住んでいたリヤドを含む内陸部は、まさにこの砂漠の真ん中に位置し、高温で乾燥した気候が続く。夏の最高気温は45度を越えることもある。

しかし11月以降は気温も30度を下回り、乾燥した空気とともに、大変すがすがしく、すごしやすい気候になる。冬には最低気温が氷点下になる場合もある。

※リヤドの月間平均気温・降水量(2010/9~2011/8)



左のグラフはリヤドの月ごとの平均最低気温、最高気温、降水量をあらわしている。

6月から9月にかけて3ヶ月も降水量が0mmになる(まったく雨が降らない)期間が続くのがわかる。

12月~2月にかけては雨が降ることもあり、時には激しい雨になり、都市部でも洪水をおこすことがある。これは雨量の多

さもあるのだが、滅多に降らない雨に対するインフラの整備がなされていないためでもあり、雨が降ったら幹線道路が水浸しになってしまい、日本人学校も休校を余儀なくされることもあった。

また、リヤド周辺では晩春から初夏にかけて砂嵐(シャマル)に襲われることがある。砂嵐がひどい時には町中がオレンジ色に染まり、視界がきかなくなってしまう。

2009年3月10日にリヤドを襲った砂嵐は過去最大規模で、空港は閉鎖され、都市機能は一時マヒしてしまった。

一方でサウジアラビアは砂漠とは思えないほどの水資源に富んだ国でもある。

小学校6年生の社会科の教科書では「海水の淡水化プラント」の記載があり、水は海水を淡水化して使っているとの記載がある。

確かにそれは事実である。私が3年間浴び続けたシャワーの水は心なしかしょっぱい味がした。

水道水にはミネラル分が多く残り、食器や理科の器具をいくら洗っても、乾いた後には白い粉を吹いていました。これらは海水を淡水化した水だ。



しかしながら、我々が普段口にしてきた飲み水(ミネラルウォーター)や農業用の水は別だ。

これらの水はすべて、サウジアラビアの地下からくみ上げられた地下水なのだ。

写真は東部の町にある井戸の写真である。豊富に水が出ているのがわかる。この豊富な地下水に支えられ、サウジアラビアの食糧自給率はほぼ100%である。特に主食である米・小麦、そして野菜は100%時給できる。

この地下水の多くは、この地域が大昔湿潤だった

ころに降った雨が、地層に閉じ込められた化石水と呼ばれる水である。当然有限である。

この写真はリヤドから車で2時間ほど南に走ったところにある「カルジの大穴」と呼ばれる巨大な穴である。直径50メートル、深さは30メートル以上ある。20年ほど前には、ここには満々と水が湧き出していた。案内してくれたサウジ人によれば「小さなころ、ここで泳いだ」そうだ。しかし現在は巨大な穴でしかない。農業用にすべてくみ出してしまった結果である。

現在、サウジではこの化石水の枯渇が大きな問題になっている。



日本人がサウジアラビアという国名を聞いて真っ先に思いうかべるのは、たぶん「石油」であろう。実際、サウジアラビアの原油の確認埋蔵量は世界一で、世界の確認埋蔵量の19パーセントを占めていると言われる。この量は世界第2位のカナダの1.5倍、世界3位のイラクの2倍である。ダントツと言っていい。

日本は世界第三位の原油消費国だが、その消費量の30パーセントをサウジアラビアに依存している。

実際、この石油資源の恩恵を受け、サウジアラビアには所得税や消費税にあたる税金がない。(ザカート=喜捨と呼ばれる寄付はあるが)

また、水よりも安い値段で、国民はガソリンを購入することができる。(リッター60ハララ=12円) サウジにいた際には、車の燃費を気にしたことはない。

ただ、この値段は原価割れだそうで、一種の国民への利益還元とも考えることができる。

火力発電所から送電される電気も安価である。これらの結果、サウジアラビアの国民一人あたりの原油消費量は、日本人の3倍近くになっている。

しかし、この原油は、サウジアラビアのどこでもとれるわけではない。

石油はアラビア半島の東側、アラビア湾（ペルシャ湾）に沿った地域（東部州）、でしか採れない。

この地域はシーア派が多く住む地域である。スンニ派が圧倒的多数を占めるサウジでは、あまり良い扱いを受けていない人たちだ。

「アラブの春」と言われた一連の民主化運動の際、サウジ中心部ではデモの陰すらみられなかったのに対し、東部地域では小規模ながら反政府デモが起った。

つまり、産業的に一番大切な部分が、一番政治的に安定していないといえる。原油産出地域は、サウジアラビアにとって心臓部であると同時にアキレス腱とも言える。

しかもその資源は有限であり、いずれは枯渇すると考えられている。

サウジアラビアは現在原発導入を検討しているという。国内で消費している原油を少しでも輸出に回したいとの考えからだ。

隣国バーレーンやアラブ首長国連邦が原油依存の経済から脱却を図ったように、サウジアラビアも石油だけにたよる経済の見直しを図らなければならないところにきているのであろう。

## 2 - 派遣国での生活

サウジアラビアの首都＝リヤドでは、生活のすべてがイスラム教を中心にまわっている。

サウジアラビアとイスラム教の結びつきは国旗にあらわれている。イスラム教の神、アッラーをたたえる言葉と、イスラム教を守護する剣が描かれている。色はイスラム教のシンボルカラー＝グリーンだ。サウジアラビアは、イスラム教の聖地「マッカ」（日本ではメッカと発音されるが、こちらではマッカと発音する）があり、イスラム教の総本山とのプライドも高く、とりわけ首都のリヤドはイスラム教の中でもスンニ派が多く、さらにそのスンニ派の中でも宗教的に保守的なワッハーブ学派が主流であるために、イスラム法（シャリーア）に厳格である。

日に5回ある、「サラール」と呼ばれるお祈りの時間には、町中のモスク（イスラム教のお寺）からアザーン（経典：コーランの一部 唯一神アッラーをたたえる言葉）が大音響で流れ出す。ここまでは他のイスラム圏の国々と変わらない。しかしサウジ国内では、そのサラールタイムの間、すべての商店や公共施設（病院を除く）が閉まってしまう。（1回のサラールは約30分～1時間）

この間、店には入れないし、店でショッピングしていたら、店から出され、レストランで食事をしていたら、照明を消されてしまう。

しかもこのサラールは日によって毎日時間が変化する。我々は常にこのサラールタイムを気にしながら生活しなければならなかった。

サウジ国内では、イスラム教の教えによって、女性は人前で肌や髪を出してはいけない。外出する際には、「アバヤ」と呼ばれる黒いロングドレスの着用を義務づけられる。これは外国人の女性でも例外ではない。外国人の女性は、アバヤを着ても、頭や顔を隠さない人も多いが「ムタワ」と呼ばれる宗教警察（勸善懲悪委員会）に見つかると「頭を隠せ！」としかられてしまう。



### 「アバヤ」姿の町の女性

食事をする場所も男女別々で、レストランの中は言うにおよばず、マクドナルドやケンタッキーフライドチキンなどのファーストフード店、ショッピングモールのフードコートですら、男女別々である。

男性専用のメンズセクション、女性専用のレディースセクション、家族専用のファミリーセクションに分かれなければならない。

また、豚肉とアルコールは厳禁で、豚肉はポークエキスすら持ち込めない。

ベーコンやソーセージはすべて牛肉かトリ肉、またはターキー（七面鳥）の肉になる。

ビールやシャンパンなどもお店で見かけるが、すべてノンアルコール（N/A）だ。他のイスラム教の国では「外国人ならOK」とか「ホテルの中ならOK」と例外があるものだが、サウジアラビアではこれらの例外すら認められていない。

強制的に「禁酒」をさせられてしまうのは、辛かった。（健康にはよかったかも知れない）

また、宗教的、軍事的な理由により、街中での写真撮影は禁止されている。

過去に何度も日本人が街中で写真を撮影し、逮捕されている。写真好きの日本人は要注意だ

ポルノの持ち込みも厳禁で、水着姿が写った写真などは黒く塗りつぶされてしまう。最近はコンピュータ内の写真がポルノ扱いされ、一時拘束された日本人もいる。

インターネットには検閲がかかっている、ポルノサイトや一部のブログサイトなどには接続ができなくなっている。

イスラム教の教えの影響で、毎週の休業日も異なる。

イスラム教では金曜日のお昼のサラ（礼拝）を大変重要視するため、木曜日と金曜日が休日となるのだ。そのため土曜日と日曜日は平日になる。一週間のスタートは土曜日からになるのだ。そのため、日本にいる方が木曜日や金曜日にリヤド日本人学校に電話をしても、休業日なので連絡がつかないことが多い。逆にリヤドから、用事がある、日本の学校や文部科学省に電話しようと思っても「あ、今日は日曜日だ！」という場合がある。日本との連絡がとれるのは「月・火・水」の三日間だけになってしまうのだ。（サウジ以外のイスラム圏の国々では、金・土が休みの国が多い）

国民の祝日は「建国記念日」しかなく、ラマダン（断食月）明けの休暇や、ハッジ（巡礼）のための休暇が約一週間ずつとられる。これは日本人学校も同様だ。



サウジのランドマークの一つ「ファイサリア」車中からの撮影



## コンパウンド内のプール

我々日本人を含む外国人は、「コンパウンド」と呼ばれる外国人居住区に住んでいる。

「コンパウンド」の中には「ヴィラ」と呼ばれる家がたくさんある。

また、レストランやコンビニのようなミニスーパー、床屋、お土産物屋さん、幼稚園（プレスクール）、プール、運動場などが完備されていて、普通に生活するだけなら、「コンパウンド」の中で事足りる。

「コンパウンド」は高い塀に囲まれ、入口にはたくさんのコンクリートバリケードがあり、サウジ軍の装甲車と兵隊がガードしている。外国人が住む「コンパウンド」はテロの対象になりやすいからである。

この「コンパウンド」の中はイスラム教からは隔離されていて、「コンパウンド」内であればアバヤを着たり、イスラムの教えに従ったりする必要はない。

我々日本人学校の教員は、日本人学校の近くの「アル・ヤママ」というコンパウンドに住んでいた。（現在はべつなコンパウンドに居住している教員もいるが）

他にも大小様々な「コンパウンド」がリヤド市内には点在している。

リヤドに住む日本人はおよそ 200 名程度で、他の外国人に比べ、大変少ない。

そのため、お店などではたいてい中国人か韓国人、フィリピン人等に思われることが多い。

「アナ ヤバーニ（アラビア語で「私は日本人だ」）」という、驚かれ、時には大変親切にしてくれた。（反面、中国人や韓国人に対する扱いは荒い印象がある。）

このように少ない日本人なので、「日本人会」はあっても、「日本人街」はない。日本の食材もほとんど手に入らない。

韓国人はかなりの数いるので、韓国スーパーがあり、われわれ日本人はそこで韓国のノリや、明太子、油揚げ、乾燥わかめ、乾燥ソバなど、日本食の食材を買っていた。

豆腐は現地のスーパーでも売っていた。（なぜか紙パック入り）

醤油は、どのスーパーにもキッコーマンの醤油を置いてあり、そのブランド力に驚かされた。しかしどれもノンアルコールであり、その分日本のものとちょっと風味が違った。（日本のみなさんは気づいてないかもしれないが、日本の醤油にはアルコールが含まれている。）

リヤドにも、数店日本食レストラン数件ではあるが、存在する。

我々がよく通った「トウキョウ・レストラン」は、料理長が日本人の方で、お寿司、天ぷら、そば等、日本と変わらない味が楽しめた。

日本人だけでなく、もちろんサウジの方もよく利用されていて、上手におはしを使ってお寿司を召し上がる姿には驚かされた。

治安は良く、フレンドリーな国民性で、特に子どもをかわいがる習慣が強いらしく、我が家の子どももよく現地の方々にかまってもらった。

### 3・リヤド日本人学校の概要



日本人学校の児童・生徒と職員一同  
お別れ会でのひとコマ

わたしが赴任していた2009年～2012年度のリヤド日本人学校の児童・生徒数は小1～中3まで20数名で推移していた。

教員は校長を含め6名。それにイエメン人のドライバー兼用務員と、パレスチナ人の英語・アラビア語講師兼事務員の現地採用が2名を加えたのが、私たちスタッフだった。

少人数で、大変アットホームな雰囲気の中、学習活動が行われる。小学生低学年から中学生まで、一緒にお弁当を食べたり、遊んだり仲良く過ごしていた。

小中併置校なので、小学部でも教科担任制を取っている。

リヤド日本人学校が、日本の学校と異なる点は、体育が思い通りにできないところにある。原因は暑さ。6月に入ると、外の気温は平気で40度を超えるので、長い間外に出たり、ましてやそこで運動したりすることは生命にかかわる危険がある。

体育館もないので、狭いホールの中だけでの活動になってしまう。

そこで、4月から夏休みまでは、水泳をメインに体育を行うことになる。

外で体育ができるのは気温が若干下がる10月か11月ごろからである。そのため運動会も、11月の下旬に行っていた。

また、私が担当していた理科でも、様々な地域的な困難が付きまとった。

例えば、小学3年や4年の一学期理科は自然観察や栽培がメインだが、サウジでは自然といっても周りは砂漠であるし、暑さの問題で、おいそれと外に観察にもいけない。

日本で植物が茂る春から夏は、暑さのため植物は育たない。おまけに日本と同じ植物の種はこちらではほとんど手に入らない（日本から持ってくることは植物検疫の関係でNG）

加えて、基本的にどの家もオール電化だからガスがない。つまりガスバーナーが使えない。

こちらのホームセンターで、キャンプ用のミニバーナーを見つけて代用したが、帯に短し、たすきに長しだった。

逆に、地の利を生かした、その地でなければできない授業もあった。

魚介市場（サーク・サマク）で購入した、50センチはあろうかという巨大イカや、スーパーで購入した丸ター匹のウサギ（写真）の解剖、緯度の関係で夏至の日に南中高度が90度になることを生かした授業、砂漠で採集できる化石を使った授業等々、日本ではできない授業を展開することができた。



また、毎年全校生徒で飛行機に乗ってサウジ国内の別な町を訪ねる「宿泊体験学習」やデーツ（ナツメヤシ）農園で行う「持久走記録会」、リヤドにすむほぼすべての日本人がそろって行う「運動会」など、サウジでしか味わえない行事、サウジナのショナルスタジアム（キングファハドスタジアム）などへの見学学習、コリアンスクールや現地の幼稚園との交流（サウジの小学校は男女が別れて学習するので、現地の小学校との交流は難しい）など、日本人学校ならではの教育活動が行われていた。

（写真は港町ジェッダに宿泊体験に行った時のもの。訓練航海で寄港していた海上自衛隊の艦艇にて記念撮影）

## 4・派遣を終えて

サウジアラビアは、一部の特別なツアーを除いて、観光では入国できない国である。日本にとって大変重要な国であるにもかかわらず、その実態を知っている日本人は限られてしまう。

そのため、サウジアラビアに関する誤解や偏見を抱いている日本人が多いと、私は思う。

たとえば女性について。免許を持つことも許されず、アバヤの着用を義務付けられ、どうしても「虐げられている」イメージを持ちがちだが、実際はそうではない。彼らイスラム圏の人々にとって、これらのことは「女性を守るため」の行為であり、決して虐げるためのものではない。我々がであったサウジ人はみな愛妻家（時には恐妻家であったが）であり、家族を大切にし、子供を守る優しい方々ばかりだった。

また苦行に思える「断食月（ラマダン）」もイスラム圏の人々にとっては一種のお祭りであり、一年の区切りなのだ。

イスラム教の国で、しかも王国という形態から、国民が虐げられているイメージを持っている人々も多いが、これもまったくの誤解だ。

前述したとおり、彼らはイスラム教を真の教えと信じ、それを守護する国王（サウジ家の王室サウード家は二聖モスクの守護者として認められている）に対する敬意・敬愛の念が非常に強い。

「知らない」ことによる誤解や偏見。それがこの国に対してはとて大きいと痛感している。

我々帰国教員が、情報発信者となって、この魅力的な国、日本にとって大切なパートナーの国について、もっと知ってもらうことが重要だと考えている。

3年間の滞在で知ったこの謎の国の情報を、帰国後も発し続け、微力ながらもサウジと日本との架け橋とならんこと、それが派遣教員の責務の一つであると私は考えている。

### 砂漠の真ん中でラクダの背骨を発見！！



私が着任前に、先輩の先生がこんなことをおっしゃっていた。

「派遣前には色々不安かもしれないけど、帰国するときには、その赴任国のことが大好きになっているよ。」

まったくその通りになった。

私はサウジアラビアが大好きだし、リヤドが大好きだ。

そして、そこに住む人々が大好きだ。

そんなサウジのことを、みんなに知ってほしい。帰国後半年以上がたった今でも、そんな気持ちでいっぱいである。